

高校演劇の 創り手たち

第12回 むらやまだいすけ

こんな寄り添い方は誰も観たことがない！ ウェルメイド・コメディの手法で、ポスト3・11演劇の新しい扉を開けた『屋上の話』。いわき市出身の顧問劇作家むらやまだいすけが、東京の、しかも、当時まだ小学校低学年だった演劇部員たちと吹き込んだ風は、復興の欺瞞も表面的な同情も、笑いのうちに吹き飛ばす！

インタビュー・文責 工藤千夏

——東日本大震災で被災された方はもちろん、ポスト3・11の今を生きる高校生たちにも『屋上の話』。未見の方に、どんなお話だと伝えたいか、作者のこぼれをお願いします。

3・11に関して、あの痛ましさを忘れないことも重要ですが、今の苦しみ、そしてこれから生じるかもしれない苦しみにどう寄り添うことができるかを問いかける作品だと思います。多様性が注目される昨今において、人の関わり方にも目を向けたつもりです。また、東京都の高校生が演じたことに意味があると思っています。

——むらやまだいすけ先生ご自身がいわき市のご出身ですね。『屋上の話』はどのように作られたのでしょうか？

3・11以来、私の中でずっと震災が燻りつづけています。なんて自分は無力なのだろうと実感しますし、素

人が言うのもおこがましいですが、一般的に芸術と呼ばれる領域のものに、何ができるのだろうかと考えていました。そんな中、震災に関するテレビや報道、そして演劇に触れるたびに、違う視点で描いてみたいと思いました。震災に関しては、いつか書こうと決めていた反面、絶対書かないようにしようとも思っていました。私自身、震災に対してきちんと向き合えていないからです。私はなかなかいわきに帰れません。風景も人間も変わってしまった現実を見るのが辛いです。目を背けよう背けようとして生きてきました。恥ずかしい限りです。

そんな中、本校の修学旅行はカナダなのですが、カナダの多様性、先生の考え方に驚かされて、特に多様性について学んでいるときにふと、私もこうあっていいのではないのか？自分で蓋をしていた感情を認めても

良いのではないかと思いました。それで書いたのが『屋上の話』です。

「震災を忘れない」というアンチテーゼを当てることで、もっと浮かび上がるものがあるのではと思い、批判覚悟で書きました。

関東大会後、落ち着いてこの芝居を振り返りました。そうすると劇中のへんてこりんな登場人物は多様性に満ちながら、今まで私を支えてくれた人たちかもしれないと気付きました。あえてあつげらんとしてくれる人、必死に気に掛ける人、冗談で吹き飛ばす人、何も言わずそばにいてくれる人。「震災」に対しての寄り添い方や人との関わり方は様々でいいと思います。そして、主人公を救う長尾は、逃げていいと言ってくれる誰かなのかもしれない。しかし、これを震災当時は小学校低学年だった東京の子たちに演じてもらうのは、私のわがままでした。ただ、彼らは私を信じ演じてくれました。東京の子が震災を、人との関わり方を真剣に考えてくれました。そっか。私は生徒にも救われていたのだな、と実感しています。

——他に、架空の江名之浜高校を舞台にし

ます。生徒は3年で卒業してしまいが、書いても書いてもほとんど入れ替わって、大げさに言うと、不老不死になった悲しみ、本当に大げさですけどそんな気がします。あんなに濃密で楽しかったのに……でも、舞台が一緒であれば、そこで彼らはずっと息をしています。時間が経っても、あ、あいつら江名之浜で会えるもんな、と。なので、宝箱です。江名之浜高校は。

——むらやまだいすけ流の脚本の書き方は？

私は、生徒の中で一生モノの思い出ができればという思いで、顧問をしています。そのため、なるべく一人一人、個性のある役を書いています。最初、面談してその子の良いところも悪いところも聞いて、その後、エチュードを繰り返して、その子に合うような役を考えます。また、私は音楽が好きでして、聴きながらなんとなくイメージみたいなものを浮かべて、勝手に主題歌にします。

話のアイディアは、なぜかわかりませんが、テスト監督中に思いつきます。これには大変困っていて、神さま！今じゃなくていいでしょ！と思いな

た『先生の話』『恋の話』があるそうですね？

『先生の話』は、江名之浜高校の会議室で夜な夜な飲み会をする先生たちの話です。実はある目的をもって飲み会をして……というもので、当時は大人の乾杯の仕方を教えたり、酔うとどうなるのかを実験を元に教えたりと、あまり教育的でなかったなーと思います。

『恋の話』は、また江名之浜高校の教室で、恋愛を悪と考え、武装している女子グループに守られる梅丘という女子に、どうしても告白したいと動き出す男子たちの話です。韓国公演が決まり、海外の方にもわかりやすいといったら「恋」かなと思います。書いたものです。結果、韓国の方も喜んでくれました。良い思い出になりました。ただ、生徒の一人が小道具のヌンチャクを機内に持ち込もうとして、出国で一悶着あり、釜山空港で大変でした。大事な小道具と言っていました。ヌンチャクは機内持ち込み不可でした。

私はこの江名之浜高校を舞台にして書いているのですが、これは顧問としての教員としての寂しさからで、監督しています。終わると一目散に机に戻り、忘れる前に取り憑かれたようにメモします。それで、喫茶店で、付箋に生徒の役名を書いて、下敷きを舞台に見立てて、付箋を動かしながら書いています。ただ、私はなぜか書いているというより、書かされているという感覚です。私の頭の中で生徒たちが勝手に喋ってくれます。それをキーボードで打っているという感覚です。ただ、喫茶店ではにやにやしながら付箋人形劇を夢中でやっていますので、「あいつは何やってるんだ」という視線はちょっと痛いんです。

——「ネタバレ」に関してはどう考えますか？

私はどんなでん返しが好きで、自分の脚本にも生かしたいと思っています。ただ、ネタバレすると、失望にも似た気持ちになります。本当に良いとでん返しは、ネタバレしてもその魅力が損なわれない強度があるし、ある意味、ネタバレした方が良いのではないかと考えることもあります。そういう作品を書いてみたいと思っております。



『屋上の話』

2018年11月、第72回東京都高等学校演劇コンクール中央発表会にて上演。
東京芸術劇場シアターウエスト
撮影：東京都中央発表会事務局

戯曲を書き始めたきっかけは？

戯曲を書き始めたのは、日大二高の演劇部顧問の宇田川豪大先生に勧められたのがきっかけです。顧問になって初めての年に観た宇田川先生の『地獄の鎖帷子』に衝撃を受け、私も書いてみたいと思いました。先生と色々話すうちに「とにかく、書いてみるのがいい」ということで、書き始めました。今では、お互い新作ができたから、喫茶店で読み合い、全くダメ出せず、大いに褒め合っています。

演劇との出会いは？

演劇との出会いは高校時代です。私の母校は男子校でして、血気盛んな学校でした。それでいて猛烈な思春期でしたから、バンドでもやって、女子にキヤピー言われて華々しい生活を送りたいと画策していました。入学して数日、帰り際に校舎を出ると、見知らぬ先輩に声をかけられました。その人は私の前に立つと、急に腰を抜かして、目をぱちくりさせ、地球の終わりみたい顔をして、「あ、あ、あ、これは!!」と屋上の方を指さしました。上を見ると、へたくそな字で「演劇部」と書かれた看板を掲げて、「よろ

しくおねがいますーす!」と叫んでいる人がいました。あつげにとられているうちに、私の目の前の人は、他の新入生の前で、僕にしたことと同じことをしていました。「バンド女子キヤピー」もよかったのですが、なぜかその人に「入部したい」と声をかけていました。それが、演劇との出会いです。でも、何もわかりませんでしたから、演劇も見ることがなかったのですが、発声練習もなんでこんなことしてるのだろうと笑いがこみあげて、先輩に怒られたりしていました。

そして、忘れもしない初めての地区大会。僕は音響とチヨイ役でした。なんだかんだで仲間と学校に泊まり込んでまで作った芝居。誰にも負けないうと自信满满、かかっつてこいといった心境でした。そして観てしまったのが、小名浜高校の『チェンジ・ザ・ワールド』。これが演劇なんだ。観ていて引き込まれて、ゲラゲラ笑って、ボロボロ泣いて。終わったとき、立てませんでした。演劇って面白いと心底思いました。でも複雑でした。プライドはボロボロで、とにかく悔しくて、石原哲也先生(※編集部注)に「顧問が書くなんて卑怯だ! 高校演劇じゃなく

ジュリエット』を公演し、後の演劇部になる、というストーリーです。ちなみにこの発表会は顧問も出演可でした、私は父親役で出てまして、アドリブを入れて、意味のわからないことしないで、と怒られました。生徒に。

高校演劇に携わるきっかけは？

教員になって「野球部」「アメフト部」「スキー部」と転々としていました。その中、演劇をやりたいという生徒が2人現れ、「そういえば、村山って演劇部だったらしいよ」ということで、顧問になりました。ただ、本校の演劇部は休部状態でしたので部員2人でのスタートでした。初めて部室に行く、ほこりをかぶった大きいダンボールがポツンと置いてあって、中を覗くと、大量のトロフィーが入っていました。関東大会だの全国大会だの最優秀だの……。

これも実はなのですが、本校は知る人ぞ知る、演劇の強豪校だったらしいのです。全国大会11回出場。今のところ、出場回数でいうと全国1位。米本一夫という伝説の顧問がいて、東京都中央大会には「米本一夫賞」があります。本校には過去に芸

術科もあって文部省の演劇教育の実験校だったそうです……と、とんでもない高校の顧問になってしまった!と思っていました。が、とんでもない「日鶴」というと、「昔、米本先生にはお世話になってね」とか「米本先生のお世話はね」という感じで、皆さんとても親切にしてくださいます。なので、感謝を伝えるに定期的に部員や家族を連れて米本先生のお墓参りに行っています。娘には、東京のおじいちゃんだと勝手に言っています。

高校演劇とそれ以外の演劇に違いを感じますか？

私は歴然と感じる派です。高校演劇は好きですが、やはりプロの作るものは、覚悟が見える気がします。

好きな戯曲、影響を受けた作家は？

三谷幸喜さんの『ラジオの時間』、古沢良太さんの『キサラギ』は好きな作品です。1つのシチュエーションで展開する話が好きです。

このシリーズに、東京都の高校の演劇顧問に登場していただくのは初めてです。東京で演劇部を指導されていることは、作

て大人の演劇だ!」と言って、平市民会館の噴水池に飛び込みました。今思えば、なんてことをしてしまっただ!と後悔しかないです。ただ私は高校生。かっこつけたかったんだと思います。

一昨年、石原先生にお会いする機会があり、きちんと謝罪しました。「実は私も今書いている身でして、顧問が脚本を書く行為がどれだけしんどいのか痛いほどわかります、すみませんでした」と謝罪しました。すると石原先生は笑って「別にいいですよ。あんまり覚えてないし。あ、噴水には入ってたね」と許していただけました。ほっとしていきます。

高校時代は、こっそり脚本を書いていました。でも、ちょっと友達に見せたり、部員に見せたりしたのですが、不評でした。根暗な部分が出てしまっていたと思います。結局、高校時代は地区大会止まりで終わりました。

大学時代は、目の前で地球の終わりの顔をしていた先輩と劇団を作って何回か公演しました。とてもいい思い出です。先輩は現在俳優をされていて、公演を生徒と観に行っています。不思議な感覚ですけど。

品に影響はありますか？

東京で初めて!! 恐縮です。東京には才能の塊みたいな顧問がゴロゴロいらつしやいます。枚挙にいとまがないです。また、生徒も色々な演劇を観ているから、面白い芝居を書く生徒もわんさかいます。高校演劇の多様な形を見ることができるので、経験値として蓄積される量が多いと感じます。ぜひ、東京の地区大会へいらつしやってください。もちろん、プロック大会や全国大会も良いですが、東京の地区大会は、なかなか面白いです。本校は城西地区所属ですが、牧歌的で味のある芝居が見られます。城東地区はパワフル!といった感じ、中央地区はスタイリッシュ……と、完全に個人の印象ですし、宣伝になってしまいましたが、とにかく6つの地

※編集部注「石原哲也先生」
1994年全国大会(愛媛) 福島県立湯本高校演劇部『俺たちの甲子園』で最優秀賞、創作脚本賞受賞。2002年全国大会(神奈川) 福島県立小名浜高校演劇部『チェンジ・ザ・ワールド』で最優秀賞、創作脚本賞受賞。「ト書き」高校演劇スペシャルに寄稿。

初めて書いた戯曲は？

『はるかの話』という作品です。4年前に東京私学大会で上演しました。恋人を失い、PTSDで苦しむ娘を家族が救うという話です。思い返すと私は「記憶」について書くことが多いな、と感じます。恋人の母親が登場し、死んだ息子を忘れられない恋人に「忘れて楽になって。でも、忘れないで」と語ります。何か今回の『屋上の話』のベースなのかもしれないと感じています。

ご自分のお好きな他の作品は？

地区の春の発表会で披露した短編の『お墓の話』は気に入っています。父と娘が母の墓参りをしている話です。20年前の江名之浜高校のインド映画部が舞台でして、色々な部活が寄り集まってきて、最終的に『ロミオと

区でもそれぞれ色が違うので、楽しめますよ。ぜひ!

高校演劇以外の上演に向けて戯曲を書き下ろしたり、提供したりすることに興味はありますか？

興味はあります。もしやってくださいの方がいらつしやれば、ぜひご提供したいです。

最後に一言!

このたびは、このような機会をいただきありがとうございます。改めて自分のことを振り返ると、とにかく人に恵まれているなと心底思います。たくさんの人に背中を押してもらっていることを再確認できました。いつか私も背中を押せる人になりたいと強く思います。



村山大輔 (むらやまだいすけ)

福島県いわき市出身。日本大学鶴ヶ丘高等学校演劇部顧問・国語教諭として勤務。ペンネームは「むらやまだいすけ」。江名之浜高校という架空の学校を舞台に『~の話』という題名で脚本を創作している。2017年 TOKYO ドラマフェスタの推薦により韓国高校演劇全国大会で公演。2019年夏の全国大会に出場。季刊「高校演劇」事務局員。